

# 翻刻『女世話用文章大成』

## 翻刻にあたって

『女世話用文章大成』（上・中・下三巻）は手習い用の往来物で、既に拙書『考える女たち』<sup>(1)</sup>では本書の一对の往来を写真付きで翻刻している。また、本書の歴史上の位置、世話字と世話用文章の特徴、元禄五（一六九二）年に刊行された男性向きの『世話用文章』との関係、女性向けに漢字を多用した本書刊行意義などについても拙書で明らかにしているので、参照願いたい。拙書ではこれに加え、本書が往来物にありがちな決まり切った用文章ではなく、当時の女性の会話を聞くような内容を持っているとその感想も書いており、その当時から本書の翻刻をしたいと思っていたのである。

本書は青森県弘前市立図書館架蔵にかかるが、公の施設に所蔵されているものでは本書が唯一のものである。外題は「女世話用文章」上・中・下、内題は「女世話用文章大成」となっている。最後の奥付には次のようにある。

中 野 節 子

書林

江戸日本橋南壹丁目

元禄十三庚辰天

須原茂兵衛

五月吉日

大坂本町壹丁目松寿堂

萬屋彦太郎

本書のどの往来文章も二段散らしであるが、ここではまず一段目を掲げ、続けて二段目を一段落して入れておいた。また、読点は筆者が適宜挿入したものである。

なお、本書の頭書及び、上巻末尾の「折紙目録したためやうの事」、下巻末尾の「よろづ折形の事并図」と「女手道具の図」は省略してある。ご了承を願いたい。

本書の翻刻に当たっては、弘前市立図書館のご好意、小泉吉永氏の多大なご助力を頂いた。ここにお礼を申し上げたい。

註

（1）中野節子『考える女たち——かな草子から「女大学」』（大空社、一九九七年）。

女世話字用文章大成序

夫 女筆用文章数多有といへ共、其章句大形替事なくめつら

しからず、今此世話用文章ハ章句めづらしく、其上女の弁かた  
き難字を加へ、女子の助に顯し畢、此文章をよくく習練の上ハ  
万字疎かるまじきと、かへすく思ひまいらせ候 かしく

元禄十三庚辰歲 五月吉日

前田氏息女 さわ筆

○女世話用文章大成

- 一、正月遊び云やる世話ふんしやう并返事
- 一、伊勢ぬけ参りの事云やるせわ文并返事
- 一、御物師雇にやるせわふんしやう并返事
- 一、うせ物ぎんミにたのミきたるふミ并返事
- 一、酒の酔に行合迷惑せし事云やる文并返事
- 一、花見に出悪口にあいたる事云やる文并返事
- 一、芝居見物に行し事いひやるふミ并返事
- 一、兄の事そしりいひやるふミ并返事
- 一、折紙目録したゝめやうの事 目録終

此春は賑敷心うきたち、昼ハ掛羽子夜ハ宝引ニて、日を饋まいらせ  
候、終松も言旧く

夕もしも三更過まで、突鼻と鬨譚居まいらせ候て、今朝ハ朝寝い  
たしまいらせ候 かしく

何かたも是年は若栄候て、爰もとにも夜昼と賭祿にして嘉留多打、

藍も五更かたまで起居候て、東雲のしらむ折からしまひまいらせ

候、屑そもし様にも弄に御出候へかしと、御噂のミ申まいらせ候

かしく

つれく成俣に不図思ひ出し、筆染まいらせ候、一昨年の今日は伊

勢様へ参り候て、未明にそもし様へ

身のまゝぬけ参り候、其時の醜さ瀧聲候事そんしいたし、可咲

独笑いたし居まいらせ候、追手やかゝらんと、臆病神にひかさ

れ候事、今に忘れられす候 かしく

仰られ候ぬけ参りの事、去年のやうにそんし、指折いたしみまいら

せ候へハ、最早三とせに

成まいらせ候、くはうあん矢のことし、日の斜るは間のなき事と  
存せられ候、間の山のをもしろさ、颯々踊のしほらしさ、今にわ  
すれかたかく候

縫物段くつかへ候て、途方に暮まいらせ候まゝ、年齢なる御針候  
ハ、御雇下され候

御そんしの通、通例の手理は旦那殿氣に入申さす候候、万事綻  
に美敷したてくれられ候人を、たのみまいらせ候

此御物師何方此方へ参られ、人並に仕立られ候やら、いつかたニても  
被譽褒美御さ候、偏に其身の手柄と申ことニ候、手續よくしごと  
擬候ハ、しかぬる人ニてなく候ゆへ、雇しんしまいらせ候

無和利御むしん申、御氣骨おらし候まゝ、忝思ひまいらせ候、厳御  
申下され候へとも

実否しれまいらせ候ハんよし、足裏に疵持たるものは、治情あら  
かふ物ニて候、機不應なから、説破なされ下され候うへは、疑事  
御さなく候

失物の事、此ものに問くれ候へとの事、段く吟味いたしまいらせ  
候へ共、証拠正しくいひ分召れ候ゆへ、必定うち付て教訓成かた  
く候

そもし様ニハ最肩偏頗もいたし候やうに、思召候ハんすれ共、全  
我身荷膽ニてハ御さなく候、此うハ又御しあん候て、外の御料簡  
なされてよろしく候へく候と、そんしまいらせ候

昨日去方へ行候道ニて、一杯機嫌の若者西風東風つけ廻、生憎と思  
ひ

まいらせ候へとも、さなから喚事も得いたし申さす、剩つれし  
ものハ這出者ニて、愚鈍ニ候て邪魔に成、足早に逃かへりまいらせ  
候 かしく

垂登者に出合なされ危めに御逢候よし、其よう成随馬髻にハよき程  
に會釈

欺たるかよく候、傍邊に人目め候ハんまゝ、別の事も候まし  
けれとも、まつく何の怪我過も候ハて、めてたくそんしまいら  
せ候

よもやま はなさいちうさかり  
四極山の花最中盛のよし、散なほ可惜と思ひ、鼠栗く見物にまい

り候へは、颯颯の幕の内より一能くといふて

所有さしあひ悪口のほめことは、偕く恥敷もまたおかしく、こゝ

ろ峰、与得花ミる事も得せず、特日もくれにをよひまいらせ候

ゆへ、ちよこく奔してかへりまいらせ候 かしく

ひがしやま はな  
東山へ花なかめに御こし候よし、御器量すくれまいらせ候御姿を  
見候て

さまくとはめ言葉申まいらせ候よし、そもし様の壮年をミまい

らせ候ハ、悶 虚勞くとしてあたくちきゝ候も断て候偕

く似物とそんなれ候

かぶさしはあはやり  
歌舞伎芝居葉流候よし風聞候ゆへ、嫂とつれたち見物に参り候へは、

濡おゝく邪氣乱

狂言にて、真味理としたる事なく、指合たらけにて候、無術忪か

ね、半に立かへりまいらせ候

わがミ  
我身も人に誘引、敏乍こしらへ、咄破喝破として白ミせ見に行候て、

をり  
折ふし

茶屋に休るまいらせ候へハ、そもし様御通り候ゆへ、黙頭まいら  
せ候へとも、見ぬふりして御行候事、難面と恨に存まいらせ候

わたしあに すけなく かりそめ  
私兄さま無人望、飯染の事も氣短、大語にしかられ、何莞爾と優  
き事なく

じやうじやうにらミ  
常住白眼つけ姦敷申され、さるとハ瘦はてまいらせ候、内とのも  
のまで私言議、きのとくに思ひくらしまいらせ候

このほう あに かへること  
此方の兄様も変事なく強義に候て、自在な所行致され候へとも、妹  
に生れし悲しさは

うつくしう  
可愛あいしらい、却 降参いたしくらしまいらせ候、何方もミな  
何不別同し事ニ候、兄弟ハ他人のはしまりと、世話にハよく申ま  
いらせ候

おんなせ わやうぶんしやうたいせい  
○女世話文章大成 中

ひすめ  
一、娘まよひ子に成候事しらせやる文并返事  
一、かたびら染もやうたのミにやる文并返事

一、あつらへ物ねん入いそぎにやる文并返事

一、男童隙を出す事いひやる文并返事

一、孫長敷成しを悦ひいひやる文并返事

一、仮寝して夢に魔し事云やる文并返事

一、婚氣に入しとて悦びいひやる文并返事

一、大へい成内義をそしりいひやる文并返事

一、妹を大名奉公に出せし事云やる文并返事

秘蔵の娘まよひ出、去邊しれ申さす、妻夫ともに周章迷臆東西と  
尋候へ共

しれかね、天命に神仏さまへしゆくくわんかけ候へハ、神仙様の御かけにて、指南人つれかへり給り、佛々とよろこひまいらせ候御事ニ候

稚無二知古一に迷ひ子に御成候よし、連剥帰るさを御忘れ候物ニ  
て候はん、嘸其折柄の御しんもく

愚弱理とあそはし候ハんと、おしはかりまいらせ候、さてく皆式そんし候ハて人ニても申まいらせ候て、御怨候ハんとめいわ

くニ存まいらせ候、先々、目下に御かへり候よしめてたく候

此瀑時勢の廻不結たる大形に、染させ下さるへく候、往時模様は辞  
にて候、其うち仰山

地散靡そめ色候まゝ、よくく染物やと御たんこう下され候て、  
はんくよろしく頼候へく候、又いつ比出来申し候や、御しらせ  
下され候へく候、めてたくかしく

帷子の事御申越候、我身かたへ出入いたし候紺屋御座候、今朝も参り、  
種く砂多の不手留風流な雛形見せまいらせ候、幸作意よき

上手にて御さ候まゝ、此もの喚につかハし、よきやうにそめさせし  
んし候へく候、そもし様は日比苛にて候まゝ、すいふんいそかせ  
忽にいたしをき申ましく候、しかし早俗にいたし候へく候、そめ  
きハあしく候まゝさやうに御心得候へく候

頃日頼入候、あつらへ物恰合見繕に与得ねん入、自墮落になきや  
うに御拵たのミ候

無遺瀬やうにおほしめし候ハんすれとも、便くとなく急く御

こしたのミ候、生付の癖にて氣せきまいらせ候、何さまのちほと  
見且まいり、御めにかゝり申まいらせ候 かしく

御詔物、夜接日候て手にくいたし目一時の間にしんし候ハんと存  
まいらせ候所に、おもひの外

出来申さす、此中ハ入身うそはたち距果まいらせ候、片時も油断  
いたし申事にてハ、御さなく候まゝ、追付立派にしたて、近内に持  
せ進し候へく候まゝ、さやうに御心得候へく候 かしく

折角御肝煎下され候男童、常強者にて旦那殿事も龜抹に致し、安忍を  
おこし、其うへ看く成

詐事を申傍輩つきあしく候ゆへ隙をつかハし候、小飼の者にいた  
し向後なかくつかひ候ハんとそんしまいらせ候へとも、堪忍成か  
たく真平如在思召下さるましく候

重一色弗にて不縫者と存、適申まいらせ候所に、皆目長敷所なく、  
無多口きゝ差別もなき奴のよし

人はうわかハにてハ見へぬ物かハと存せられ候、親許へ送届 乞

習氣致させ候へく候、兎角人にハそふてみよ馬にハ騎てミよと申  
事、今おもひあたりまいらせ候

いとくの孫居座候て座敷中を這躰、幾等傍に有物何と事なく觸  
散、訶は脂茶をいひ泣出し、さるとハ大膽者、親ももてあまし  
かんぼうたをし、藐も寢瘦はて、いかひ世話にて候、しかし、動  
乳をあまし目を見つめ、卒死をいたし候、若施瘡の煩熱にてもや候  
ハんこと案しまいらせ候、些御越候て、御覽下され候ハゝかたし  
けなくよろこひまいらせ候 かしく

御奔走の孫子さま、おとなしく、人臆面もなく悼く阿和晒手打く  
の真似

流石氏より生長にて温蕩なる生質、有福にミへまいらせ候、熱氣出  
て御氣つかいに思召候よし、さためて寤冷か知恵ほとをりて候ハ  
んまゝ、御きもしなされましく候

心氣つかれ草臥候ゆへ、ひよつと仮寝いたし候、夢に雨微降夜共恵行  
ともしらす

惘然く出まいらせ候へは、ミちの真先にわかひ女子、跋髪を乱、徒空念としてぬまいらせ候、戦慄泣叫、魔まいらせ候、目覚てのうれしさ、身うちにしつほりと汗かき居まいらせ候

御真眠候へは、無逢轍夢御覧候よし、さやうの時ハ氣疎寤ものにて候、能く存候へは

夢程不思議なる物ハなく候、おもひかけなき事を、ありくと見る事まゝ多く御さ候、其内あしき夢を見まいらせ候時ハ、氣にかゝり氣味のわるき物にて候 かしく

喚向まいらせ候婚、中く健人にて、我身事面倒にも思はれず、孝行ニしてくれられ、皆く鐘愛、悦申御事候、其うへ不忍の心すきとなく

浮波くと鹿相成所ハ、卒度もなくうちつき、物の云為一つとして徒事も候へて、世諦かたハ万事に氣をつけ、始末しられかしこき人にて御さ候、心たてしんまくな、僊として、人のすぐ客議にて候、左右人は心にて御さ候 かしく

仲人申入候御婦子様、御心に入候よし、何より嬉しく候、早晩ちよつと御出にて候ゆへ

許諾 姑様へ心つけ第一になされ候へとまいらせ候、又ハ如鼓くとはしちかくへ出、漂輕らしきはなしなど、大語になされましきと申まいらせ候へハ、合点のよき御人にて、賑然とまいらせ候て御さ候 かしく

先文字始て御けん成候御内儀様、去方にて又出合まいらせ候か、人を云平懷腑悪人にて候

身成行一風候て何とやらん物のはてのやうに、そんなせられ候と、ミなく謚僉議区にて御さ候、かさねてつきあひ申事ハいやにて候と申事にて候

御玉章なかめ入まいらせ候、何さま女子の詞に勿云勿為などいふ事、常の女子いわん事にて候

まことにたちハふりを頭とやらん、湯女・傾城のはてのやうにみへまいらせ候、贖人事にて御さ候、人を向下候事、身の程しらぬ人と殊咲く思ひまいらせ候 めてたくかし

人は心程の縣世と申事妹にて思ひ当候、幼稚の時より氣の引張たる  
珪惠奴にて、大名奉公より

まいらせ候か此頃ありつき、十三くとして下りまいらせ候、し  
かし母様よろこひの中のなけきにて、今生にてハ逢事ならぬやうに  
思召、恋懂させ給ひ、轟めいわくいたしまいらせ候

○女世話用文章大成 下

- 一、加茂の競馬見物に行し事云やる文并返事
- 一、お物師紅たち損ないし事云やる文并返事
- 一、けし人形もらひ礼をいひやる文并返事
- 一、大名奉公の目見へ出立を問にやる文并返事
- 一、きぬの襦袢そめやう頼にやる文并返事
- 一、初雪ふりながめ入酒宴の事云やる文并返事
- 一、くわんをんめぐりせし事云やる文并返事
- 一、よろづ折形の事并図
- 一、女手道具の図

殿達に唆され候て、加茂の競馬見物に参り候、中く何より治合あ

る、おもしろき

見ものにて御さ候、何としてか太 逞馬斑人くんじゆの中へ轟驛  
といなや、是抑いか成事が出来ると惴惴、をし合僂半死したる人  
多御さ候、かさねて参り候事いやにて候

自も五月朔日の足そろへに、過し年まいり候か、相図の太鼓丁扣と  
驅出し

勝負の木のもと迄颯と入、權僂をあらそひ、凱音あくる早俗を見  
まいらせ候へハ、少氣成ものは、中く氣の減事候、見物の官衆  
活くとして声をあげ為答をと、地響いたし、物廓然き事にて候

樞にいたし候半与存、紅袴足此中濃御物師に擬まいらせ候へハ、  
分くくに裁毀

縫め唱斜無作口作としたる、仕たて袂のかけやう、綴なともせ  
はくして散々の物にて候、あれにて物ぬひにて候なと、呀事、  
人を儼獨やうな事にて候

大事の御小袖段くくに裁崩、其上仕立もよろしからず候よし、阿房敷



事ことにて候、不ふ会かい候ハ、かたから取とつく事、いらさる物ものにて候、縫ぬい括くわ云いたてにて

御奉公ごほうこうに來申候よし、口入くわいれの人も知ぬといふ事は有あましく候こ、かへ候やうな事こと、親おやは名なたかき仕立したてしやにて候よし、聞きこまいらせ候か、漸やうく其そのくらゐならハ、褒とほ授まもいたし候はかりにて候ハ、まことに手理てきりの子ハ手てづか槌ちと申まをまいらせ候事、此人このひとの事ことにて候

弄もてあそとして乙松おとまつかたへ幼氣いぢげなる罌粟けしにんぎやう人形にんぎやうしなく給たまり、重宝ていほういたし多集たかり菟う並置ならをき

一切いっけと打詠うちやまいらせ候、中なにも捻合ねあひ相授あひまして居申候やつこ却含はづんでしほ可笑おかしく、咄笑どつわらひ、祖母はば様も冷咲にがわひして御ごさ候、御礼ごれいのため申入まをまいらせ候

愛想あいさうにも成候ハんとそんし、余よ所ところより貰もらまいらせ候ゆへ、しんし候所に、扼うてをして居ゐまいらせ候、放廣はくわく可咲をどけとの事

こゝもとても打うより沼田のたうつてわらひまいらせ候、其許心膜そのこしまくなる御お嬢ばう様さへ、忍笑にんぎやうし給ふとの御事、大かたならぬ興きやうに成候と、いかほとかまんそくにそんしまいらせ候

御心安おころやすさのまゝ、窺うかがひのため文ふみして申まをまいらせ候、御目見めへの上服うへきは縮緬ちりめんの地白ちしろけんしもやう、金紗入きんしやいり

帯ハ紺繻子こんしゆすをいたし襦うしかけ襦うしかけ二て、下髪さが缺腋けつあきにして、出申いで覚悟かくご候て御ごさ候、此通このとほてよく候ハ、御申を頼上たより候、又く何時なんときにまいり可申候や、御さつし待まちまいらせ候 かしく

細々こまとの御せうそこ、詠入ながめまいらせ候、衣裳いそうつきの品々御申こし候、中く奇羅美きらひやかなる御出いでたちにて候

帔かづきをめし竹輿かこにて御越候へく候、日英ひえいに御迎むかひに人しんし候ハ、まゝ、御拵ごしらへ候て御待候へく候、首尾しゆびよく相濟あいすみ候へハ、直に御湯すくもあるはづの有筈ようはづ候まゝ、浴衣ゆかたなども御用意ようい候て、よろしく候へく候 かしく

此絹襦このあじゆばん袷あじゆばんにいたし、肌はだに着候へく候と思ひまいらせ候まゝ、鬱金うこんに染下くさるへく候、砾茶とのかやの下衫したきも

もはや檻襦つづれに成候て、きられ候ハす、千斎茶せんさいちやのは外母うはにとらせ、其外ハ拵すそつきてき候へく候、見苦敷みくるしき敷かすなく候て、常住しやうじやう着きにことをかきまいらせ候

汗衫動下くとやふれ、ことかき遊され候とて、染させくれ候へと  
の御事、御好の色より、下地を藍ニそめ

瑠璃紺が檳榔子になされ候ハ、よろしく候へく候、又ハ萌黄ニて  
もよく候ハんと存まいらせ候、世間ニ憲法そめいたし候事、世帯も  
ちのする事ニてハ御さなく候 かしく

珍敷初雪降発く詠、古歌など吟しまいらせ候へは、女子共陰氣な  
偏廻と申て、雪消にとて

酒を湛とのミあひ、後ニハ心そけ顔尤赤になし、たかひにしいや  
ひ、時行小うたうたひしともなくして暮まいらせ候 かしく

此方にも花の雪吹にまかふ雪をあつめ、雪転雪うち、氷か泮にさゝ  
ひとつなといふて、閑居離の

水あびるやうに總威に酔つふれ手車にのり、重祭く、蹲踞くと  
申、女子のあはれ申事、馬子成事と銀評としかりまいらせ候、都詰  
所ハ主の名たつ事ニ候

観音巡致候半とそんし、行暗しふんに内を出候へは、霧深真闇ニ

て、人おもてもミへす、杖ニて探廻

漸く道筋に出申候、親たる人され候ハ、夜三更、東しらミてか  
ら出候へと申され候を聞入す、情強ニ出、道ニて何程か後悔いた  
しまいらせ候 かしく

我も東雲未明うちに、歩行候へは、思ひの外難義なる迷ひ道に出、  
迷惑致候

方様ニも此ほと観音詣ての折から、御踏まかひ候よし左行右行なさ  
れ候ゆへにや、かさねてハ夜深にハ、いらぬものニて候